河上肇記念会報

No. 11
1982. 1. 1

〒542
大阪市南区長堀橋筋一―三（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五二―三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

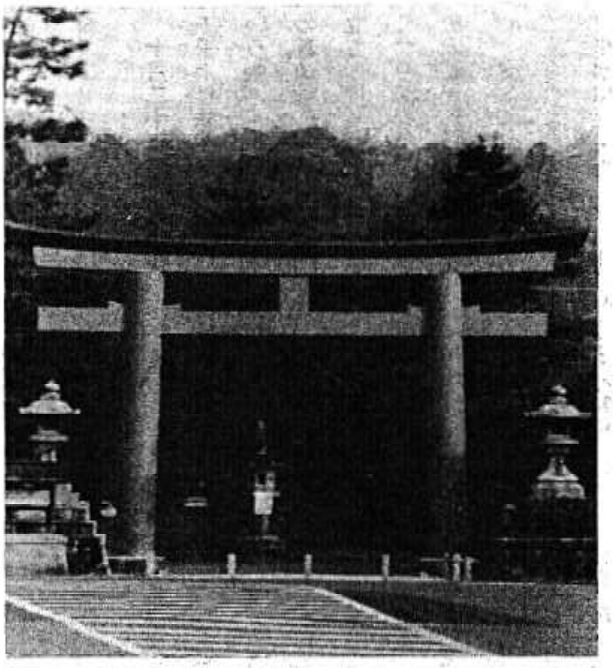
新年のごあいさつ

世話人代表　杉原四郎

明けましておめでとうございます

一九七二年に京都で河上肇遺品展示会が開かれてからちょうど今年で十年たちました。河上肇記念会はこの展示会を契機に生れたのですから、一九七二―八二年はすなわち本会にとっても最初の十年間にあたります。したがって今年は、私たちがつぎの十年間、つまり本会にとってのいわば第二期をむかえる最初の年にあたるわけで、そのことを思うと、一層身のひきしまる感じがいたします。

展示会の三日目（六月三日）にあった記念講演会で、講演した際に、私は河上肇全集が生まれるべきだということを強く訴えました。その全集が十年後の今年の一月から、いよいよスタートします。著作集新版刊行の相談を筑摩書房からうけたのは、一九七三年十二月八日のことでした。それ以来今日までの迂余曲折を顧ると、感慨無量です。年頭にあたり皆様の御支援のほどを願い上げる次第です。



河上肇の終の栖近隣・吉田神社

一九八一年度総会特集

十月二十五日。河上肇記念会総会の日なれば空晴れて、秋露の道を若王子より法然院に赴く。　いつの頃からこの疎水沿いの道を哲学の道という由。　杭打たれ、綱引かれて観光道となり果てて、かつて、時に犬の蹤道端に残りながら、老婆、芥を焚め焼く煙がもみじそめた桜並木に立ちのぼり霞む風情、今はなく、生垣にさざんかの花咲きはじめ疎水にうつり流れるさま、わずかに変らず。杉落葉掃くあねさかぶりの老女の傍を過ぎて石段に向かう。　細川氏立つ。　河上先生夫妻の墓に近寄れば、鋭いひよどりの声飛んで、背を曲げて竹箒持つ人、大橋先生、持って来られた梅干をアルミ・ホイルに包み分け、茶を飲めば、大門氏見えて俄かに活気づく。　十一時すぎ本堂にて法要。　先生縁者の羽村夫妻に続いて一同墓参。　弁当並ぶ席につけば正午を過ぎて大門英太郎氏挨拶に立つ。〔以下の総会でのご講演、ご発言の文責は、『会報』編集部にありますことをおことわりいたします〕

開会挨拶

―どうぞ弁当を食べながら―

大門英太郎

どうぞ私の話は弁当を開いて食べながら聞いて下さい。　本日の総会には沢山の会員の方々の御出席を得、有難う存じます。　御報告すべき第一は会報に申上げましたように、新しい代表として杉原先生に御就任いただいた事、今日は住谷先生をお迎えする予定でしたが、体の具合が悪く、出席が出来ませんので皆さんに宜しくとの伝言でございます。第二は近く岩波書店から河上肇全集が発刊される予定で、杉原先生、一海

目次

新年のごあいさつ　杉原四郎(1)
一九八一年度総会特集
開会挨拶　―どうぞ弁当を食べながら―　大門英太郎(2)
お土産の由来　大橋隆憲(3)
〔ご挨拶〕　河上の豊かさ　―大正四～六年を例として―　杉原四郎(3)
〔講演〕　河上先生の光　藤田敬三(6)
全集発刊のこと　米浜泰英(8)
労働者研究者の養成によって　池上淳(9)
さまざまな縁　山下肇(11)
農民運動家だった父　田辺平(11)
平和と民主主義を守ること　千田晴之(12)
核物理学者として娘に代り　池上栄胤(13)
時代を越えて河上を蘇らすために　三輪三雄(13)
偉い先生という印象　稲田素臣(14)
全集第二回配本の校訂から　―河上の陸放翁鑑賞―　一海知義(14)
東京河上会と河上肇記念会　藤原良雄(15)
お墓参りに　麻生正子(16)
健全な会の運営のために　児玉誠(16)
閉会の辞　大橋隆憲(16)
塔婆立て寄進　(17)
会員通信　(17)

先生が編集委員でありますが、会員の皆さんからもこの全集はぜひ成功させようと、いろいろな投書が参っております。我々記念会としても東京河上会と一緒に全集の刊行のために出来るだけの活動をいたしたいと存じます。昭和三八年から始ったと思うのですが、筑摩書房から河上肇著作集が出来まして、河上肇著作集刊行記念会というのが組織されました。藤田先生のお伴をして刊行記念会の設立打合わせに参りました。京都と大阪で刊行記念の講演会を開催致しました。その時、古いいろいろの方がおられて菅原先生、壽岳文章先生を招いてやりました。一年余り経って刊行が終了しました時に記念品を配布致しました。またまことに記念の文鎮と刊行記念会の名簿がありますので、お廻し致しますから、御覧下さい。亡き数に入られた懐しい方々のお名前もございます。趣意書を読ませていただきます。（趣意書、朗読略）新しい全集の刊行に対して記念会の全力を上げて応援したいと存じますので、皆様も宜しく。（事務局代表）

お土産の由来

大橋隆憲

参拝いただいたお墓の右に梅の木がある。どなたか知りませんが剪定してくれて、一年おきに梅が出来、末川先生や住谷先生の御援助で出来た〝ひまわり幼稚園〟の藤木さんが漬けてくれ、以前にも一回、河上会で配ったことがあります。京都には旧友会（戦前いろいろの運動をやられた団体ですが）の一人幹山君が持って来ましたのでお配りする。ほんの少し、大きいものもあり、小さいものもあり、酸っぱいのもありいろいろですが、そういういわれのあるもの。どうぞお持ち帰り下さい。（百年祭の年の梅の実を漬けた梅干。）（事務局顧問）

ご挨拶　河上の豊かさ

――大正四～六年を例として――

杉原四郎

会報に御挨拶を載せていただきましたが、このたび、河上肇記念会の世話人代表の大役をお引受けすることになりました。末川、住谷両先生の後を継ぐということはとても私の任ではございません。また、私は河上肇の教えを直接受けたという事ではなくて、十六年の十二月に京大の経済学部を卒業したのですが、石川（興二）先生、谷口（吉彦）先生、あるいは蠟川（虎三）先生や柴田（敬）先生といった河上肇の教えを直接受けられた先生方の講義や指導をいただいた、いわば孫弟子に当るわけです。河上肇の勉強も戦後やり始めたということで、多くの方方のように直接教えを受けたわけではない、そういう者が、この記念会の代表になるということも、やはり一つの時勢の流れ、より若い世代に河上を引継いで行くという意味もあろうかと存じます。スタッフの方方が会の実務はやって下さるので、それにおんぶして出来るだけのことをやらせていただきたいと存じますので、よろしくお願い致します。

全集のことは昨年この会の時に御報告申上げたと思いますが、その年の十二月の岩波の新刊企画に載るかどうかは微妙だと申したのですが、その年には出ませんで一年おくれたのでありますが、いよいよ来年から全三三巻の全集の刊行がスタートいたします。もっとも、第一期二六巻、第二期七巻ということですが、いずれにしても大変な事業です。いま大門さんから、全一二巻の著作集の時の御紹介がありましたが、今度は量的にも倍以上という大きな仕事で、私供、編集委員はこれからが正念場で二・三年はそれに没頭しなければならないと思っております。

筑摩からパトン・タッチされた岩波書店さんの方も大変なお仕事だろうと思います。

成功裡に終ることが出来ればと思うのですが、それにつきましても、会の皆さんの御声援がなければ、とてもむずかしいと思います。よろしくお願い致します。私は今、大正四～六年頃、河上が書いたものを少し読んでいるのですが、河上はある一つの考え方を強く出すと同時に、それと違った考え方が絶えず彼の頭の中にある。そういう点が河上の一つの思想の特徴ではないか、それが河上の巾の広さ、複眼的な見方、柔軟な問題へのアプローチというか、そういうものが河上の考え方、思想あるいは人間の魅力ではないかと思います。その頃のものを読んで見ても、例えば、『祖国を顧みて』というのがありますネ。大正二年から三年にかけてヨーロッパに留学しておりました時の彼の感想や紀行を集めて出した随筆集です。大正四年に出ております。それを読んでおりますと、河上はドイツ、ちょうどベルリンで大戦の勃発に遇いまして、這々の体というか荷物を纏める余裕もなくロンドンへ向けて脱出するわけですが、ベルリンにしばらくおって、ドイツ開戦当時のことを知っている。ドイツはなかなか一旦事があると急に戦争状態に切り換える。国家的統制が強く、実に見事なもんだとドイツのやり方に対して感嘆している。イギリスに参りますと徴兵制度でなくて志願兵なんですネ。一旦緩急がある時でもなかなか全体として戦争体制に入らない。非常に手間がかかる、まだるっこい。特にドイツと比べるとそうだ。しかしそのイギリスのやり方も、うまみがあって、むしろこの方が大きな戦争をじっくり国民全体としてやって行くのにいいのではないか？そういうイギリス流にも魅かれるものがあると言って、イギリスにずっといる間に、自分は何と言っても日本の国がいいけれども、日本以外に住むならイギリスなら住んでもいいと言ってるほど、イギリスが好きになる。

貧乏物語。貧乏を退治するには二つの方法があって、一つは制度を改革するという方法、しかし制度をいくら変えたってよくならないから人間の心を変えなきゃいけない。制度改造か精神改造かという二つの道がある。両方共必要だと思うけれど、貧乏物語では制度をいくら変えたって駄目なので、人間の考え方を変えなければいけないということを自分は重視したいと言って、最後は心構えを変える、特に金持に贅沢をしたり奢侈品を沢山買いたいと思ったりするから、そういう所へ物資が廻って行って生活必需品が出来ないのだから、貧乏物語の終りで天下の金持に贅沢をやめて欲しいと訴える所で終っているのであります。それでは河上はもっぱら、精神改造論を考えていたかというと、必ずしもそうではない。いろんな所で講演をしており、そのノートが残されております。「現（うつゝ）の国から夢の国へ」という題があり、貧乏物語のことが骨子として出て参りますが、そこでは制度改造論なんです。貧乏を退治するには明治御一新の時に幕府の大名が蔵籾を奉還したように、現在の大名である三井や三菱やその他の金持は財産や工場やを全部天皇にお返しする。全部国家の官吏になって、全部国営にする。そして必要なものを作る。貧乏をなくするような生活必需品は全部俸給として貰って、一億一心になって貧乏を退治すること以外に貧乏の解決はないんだと言っている。大正五・六年に一方で制度改善でなければいけない。それに戦時のドイツでやっているように統制経済をきちっ

と国家的にやることを河上は述べている。　そういう二つの考え方がほぼ同時にあって貧乏物語の方は精神改造論がクローズ・アップされておりますけれど、制度改造も河上は考えていたような気がするのです。　また大正六年「如何に生活すべき乎」という本を訳して、河上は同じ弘文堂から出版しております。　いかに生活すべきか？　ハウ・トウ・リヴという当時アメリカの健康増進協会という所から出た本で、そこには健康を増進するためには、いい空気を吸わなきゃいけない。　衛生の点から見て、ちゃんと整った住居に住まなきゃいけない。　脂肪分はあまり食べてはいけない。　あるいは酒や煙草を沢山とると、どんな害が出るかというような統計数字がいろいろありまして、健康維持、健康増進には個人が日常衣食住について、どういう心構えが要るかというハウ・ツーの本なんです。　とういうものをどうして、わざわざ河上が訳したのか？　「如何に生活すべき乎」という題名だけを聞きますと、河上が訳したんだから、これは自己と自他の葛藤とか、経済と道徳の何とか、人生問題的な本ではないかと思われるかも知れませんが、中味は全くそうではなくて、煙草をなんぼ以上吸うとこれだけの害があるから気を付けなさいとか、そういうものを河上はどうして訳したのか？　その頃、石田憲次という英文学者がいまして、この本の下訳は石田君がやってくれたので、自分はそれほど時間を取られなかったけれども、しかしなおかつ、そういう本を貧乏物語がジャンジャン売れている時に同じ弘文堂から出したか？　河上自身弁明をその序文の中でしております。　河上が明治以来ずっと関係がありました経済学者フィッシャーがアメリカ健康協会の顧問をしており、訳して見ないかと言って贈られたので、読んで見ると、貧乏物語に出て来ますようにその頃河上は衛生の問題、カロリーの問題に関心を持っていたのです。　労働者が重労働するには何千カロリー要るか？　それで生活必需品がどれだけ要るか？　それでボヴァティ・ラインが決まる。　その統計も貧乏物語に出て参りますし、同じ頃書いた婦人問題雑話で女工の寄宿舎の衛生状態が非常に悪い。　悪いから結核になってそれが農村に帰ってまた農村に結核が出来る。「国家医学会雑誌」という所に石原（修）という人が発表した「工場結核の問題」というのを彼が読んで衛生状態が非常に悪いということを書いています。　カロリーとか、衛生問題とかに関心を持っていたけれども、個々人の健康を維持するにはどうしたらいいかという本を河上が何故選んだかということは、ちょっと奇異の念を感じますが、それに対して、彼は天下国家のために自分の天分を伸ばすには健康でなければならないから、この本は役に立つだろうと思ったということが書いてありまして、最後にラスキンの文章を引用しながら、いつ死ぬべきかということを知らない人には、どう生くべきかを本当には考

えることが出来ないんだ。　この本はいかに生くべきかを書いてあるが、この本を本当に活用するため、人々はいかに死ぬべきか、いつ死ぬべきかということを絶えず考えていなければならない。　そういう人にとってのみ、本当にこの本は役に立つのだと条件をつけて日本の同胞に贈ると書いている。　河上はそういう死生観を厳しく持っておりながら、それじゃ毎日・毎日どうして過すかということについて、全然関心がなかったのではなくて、そういうことにも関心がある。　それだけでなく、如何に死ぬべきかという自分の人生問題を絶えず腹の中に持っていた。その両面が「如何に生くべき乎」という本を大正六年に出した。　その序文の中からも窺えると思います。　河上の何かに魅かれて、そこから何かを学ぼうとして集って来られた方々に、この会が出来れば何かのお役に立つという風に心がけて参りたい。　河上のいろんな側面、豊富な彼の足跡に、我々のそれぞれの問題、関心を通じて之等を学んで行きたいと考えております。　一言ご挨拶申上げました。（世話人代表）

〔講演〕

河上先生の光

藤田敬三

しばらく前から急に神経痛になりまして、悪い時にこんなことになりまして、立ってお話ししようと思ったのですが、お言葉に甘えて座らしていただきます。私はこんな形でお話し申上げるというような資格も筋合いもない人間なんですがいろんな人間が、いろんな形で河上の会を意義あるものにして行くために協力しようじゃないかという意味からすると私のような者も何かのお手伝いが出来るのではないか。時々呼ばれた時だけ出て来るという具合で会員としては、たちがいい方ではない。いろんな事情でその程度しか出来ない。私が河上先生を偲ぶという気持で何か想出のようなものを話しさせることに意味があると大門君が考えたんだろうと思います。私の値打は年で、他に取り得がないが、年令からすると相当なもので今年八十八になる。神経痛ですが相当動いている。心臓の調子が悪くなって大きな口は叩けない。身分のことについて大門さんがお書き下さったのは経済大学の学長という事になっていますが、そういうことはやったことはありますが、唯今は理事長という雑用係であります。先日、お前は学長をやっとると書いてあるが、あれは嘘やろうという抗議の葉書が来ましたので、つまらんことですが一言弁明しておきます。私は河上さんに教えは大いに直接に受けたんですけども、多くの方のように先生の光沢を直接いただいたということは少ない。先生が大陽であればお月さんのような、大きな星のような人間が私と先生の間に沢山ありまして、そういう人々から先生のお光を頂戴したという間柄の方が主であります。先生に直接お目にかかってお話を申上げたり、お話を拝聴したり、また時には大変結構なお手紙を頂戴したことはありますけれども、他の友人連中と比べると先生との関係は薄い。私は先生の親友河田嗣郎先生のゼミを出た。直接のゼミ生でもなく月や星のような連中のように先生のお宅にお邪魔して直接お教えを受けた連中とは違う。河田先生の弟子やからあまり先生のお宅へしょっちゅう出入するのはまずかろうという意味は多少あったかも知れないが、そういう意味ではなくて、いろんな関係から先生のお宅へはあまりお伺いはしなかった。例えば、先輩としての末川さんあたりから、河上先生の話がしょっちゅう出るわけです。その他の石川興二君福井孝治君、管原昌人君、月や星に当る先生の光を直接に豊富に受けた連中ですが、そういう連中とは違って、私はそういう連中から思想的には相当影響をいただいた。何故そうなったか？

実益の方から言うと、私が直接先生の方へ伺っていろいろ影響を受けるよりは、石川、福井、管原という、私の見る所、先生がなくては夜も日もあけぬという連中から、しょっちゅう先生の話を聞かされている。私が一人で先生のものを集めるよりも、連中は長い時間をかけて、先生の思想や学問を勉強していて、そのエッセンスを私の所へ持って来てぶちまけんと気がすまん。聞き上手であったかも知れませんが、私も非常に能率が上りますから、連中の三人分のやつのエッセンスを吸収するというわけで、先生のお宅へ伺う必要がなかった。三人以外に三高の時から同宿の者で先生気狂いがいまして君も一緒に行こうと誘われたが、先生の所へ行くのはまだまだ早いという構えだった。後から三人が出て来て直接お目にかかることが少く、三人がいるので先生に迷惑をかけることが少かった。そういう理由によって、先生がご用がある時は藤田君ちょっと来いということもあり、大変鄭重な、おそれ多いような手紙を頂戴して大変感激したこともあります。全体としては今言ったようなことでした。私の先生に直接にあまりふれなかった理由の中に人間のあれがちょっとうまく想い合わない、性が合わないという面があって、先生にちょっと来いと言われても、先生なるものもっとぶちまけて、何かの場合でも命令したらよいのに、河田先生の弟子であるからあまり深く交ったらいかんというお気持があったのかどうかわかりませんが、なんとなく遠慮せられるような恰好があった。何だか河上先生だけでなしに、河田先生も（最も深く接した二人の先生なんですが）先生なら弟子を子供扱いにしてこき使ったらええというような形にしてくれたらええのに、そうはして下さらんで、長州の先生がそうだというわけではないんでしょうが、偶然にも先生お二人とも、私も遠慮するし、先生方もどうもウマが合わんということであったかも知れません。その点、相当の偉い先生でもウマが合ったら平気で友達みたいにするのが特徴なんで経済学をやっちゃおるけれども、経済より他に私の本領の天分があった、経済学は天分に関係のない所へ入って来たんだということで、あまり遠慮しない所もあった。例えば高野岩三郎先生とか、大内兵衛氏、矢内原忠雄氏とか先生筋ですが、そんなに親交あったわけではないけれども、会うて話す時には百年の知己のような気持で話をするような、また出来るような私の面もある。その人間が河上先生となると、何だか億劫になる。先生とこへ行って管原と同じように下手糞の碁を打つ、先生も下手なんだからあれ等に比べたら私の方がずっとうまい。うまいんだから先生に教えて上げたら面白かったかも知れんですが、まず行かない。だけれども私自身としては貧乏物語以来全く先生の思想には感激しまして、そのお蔭で勉強はあまり、いやほとんど、進まなかったけれども、特に先生が学校をお辞めになる時とか、更に進んで実践の世界にお入りなった時分の勇気というものに非常に感激しまして、今日、私が顧みて、なんとかかんとか勇しいことと言うとったけど、だんだんと剥げて、終いに筋の通らんようなことを言うたり、書いたりするような人も、仲間の中にもおったけれども、私自身がそんな見苦しいことにならないで済んだのは先生の影響が非常に多い。特にこの河上会の皆さん等にお付合いして影響を受けたことのお蔭だと思います。心から感謝して、これを何とか、こういう年になってもそれなりに出来ることを何かやらないかんと考えております。僅かに出来る範囲で何かお手伝いをしながら皆さんの影響を受けて、また何か出来ることがあればやらなくちゃいかんと思うて、こういう所へ出て来る。関連して、いろんな形で河上先生の教えが徹底するようにいろんな事をやっております。私の考えではこの頃、日本のかっこうがまたおかしくなった。お互に皆感じていることだと思うんです。戦前の状況はよく知っております。戦争に入ってからも苦労は容かにあったものですから、私ら、牢には入らなかったけれど、（牢に入ったから

非常に苦労して、年に入らなかった奴は単怯者で役に立たんというようなことは言えんと思うんです。）非常な苦労がありました。その頃のことを考えると今の状態は重大だと私は考えます。その重大な今、河上会として何かやるということは大変むずかしいと思うんですけど、似たような先生の光を受けた人間が、今の状態では、それぞれ個人として出来るだけのことを何かやらなくちゃいかん。会としてやらなくちゃいかんかというと、また都合があります。個人としては何をやったって、正しければいい。やったとで迷惑あったら、自分が厭るだけですから、そういう意味では出来るだけのことをしなきゃいかん。さきほどの杉原先生のお話しにもありましたが、死ぬることを考えんだら、生きとっても意味がない。私もそう考えるんです。適当に死ぬことを予定して、その余った時間の中で出来ることをやらねば、後で大変残念なことになると考えますンで、個人として何かやることがあるんじゃないかと考えまして、本日もこういう所へ出て来ました。また、皆さんも、個人として、会として出来ることもありますけれども、これは私はあまり触れたくない。私も個人としてやらなきゃならんことを、そのうち纏めたいと思っていますが、皆さんに出来ましたらヒントを与えていただければ有難い。私はなんぼ心臓がうまくやってくれても、三年から五年位だと思うんです。早ければ一ト月か二月かも知れませんが……。時々、年寄で長生きの話をしよる最中に死ぬ奴がありますが、それはともかく先が短いですから、その先が短い私が、おのれを生かす方法、参考になる奴、こんなのがあるというのをお聞かせ願えれば非常に有難い。会のお手伝いをさしていただくと思いながら、自分のことをお願いした恰好で筋の通らん話をしましたが、河上先生を憶うためのものでありますから、お許しを願いたいと思います。長談義で失礼いたしました。

〔総会発言〕

河上肇全集発刊のこと

米浜泰英

岩波書店の米浜と申します。河上先生の全集を来年の一月から刊行することになりました。岩波書店でお引受けさせていただきましてから、二年半近い時間がかかってしまいました。私達も最初はどんなにかかるとは思いませんで、もっと早く刊行出来ると実は思ってましたが、実際に取りかかって見ますと、予想以上の時間がかかりまして、河上会の皆様には少しづつ時間が延びたりしましたので、大変ご心配をおかけしたことと存じます。お詫びいたします。私達途中から全集に接したために、いろんな仕事の内容を飲み込むのに時間がかかったのと、筑摩さんからいただいたものを、少し活字を大きくして読み易くしようということで、全巻編成内容をやり直したりしましたので、時間をかけてしまいました。杉原先生を中心とする編集委員の先生方には何度も会合を重ねていただきまして、大変なご苦労をおかけして参っております。ただいま、内容見本―本が出る前に全国の書店に配るパンフレット―を作っている所です。これが十一月の末頃出来上る予定でして、全集の内容は公表していないんですが、河上会の方々には、一足先にご覧いただいたことと思い手書きのコピーであまり綺麗でないんですが、簡単な総目次を用意いたしましたので、お配りいたします。全集の内容につきましては、杉原先生の非常に行き届いたお話が会報に掲載されていましたので、内容について更に申上げることもなさそうです。三三巻という大部なもので、第一期二六巻、第二期七巻という形で刊行させていただきます。一期、二期というのは、ちょっと変則的な形になるのですが、なるべく間を開け

ないように一期が終って一年以内に二期を出せるような形に出来ればと思っております。岩波では全集とか講座のたぐいを出す時は、全巻予約という形で販売させていただいておりますが、今回もそういう形で第一期の予約という風にお願いしたいと考えています。この目次をご覧いただきますと、原則として編年順の配列を採っております。発表した順番に、巻の中では単行本になったものを一番始めに持って来て、その後に論文が続く形です。左側の欄外に丸をして番号を打っておりますのが配本順です。第一回が第三巻の〝社会主義評論〟とか〝人生の帰趨〟あと読売新聞の記者をしていた時代、無我苑に入ったりした時期のだいたい全部三巻に収っています。二回は陸放翁鑑賞、これは一海先生にお願いして大分作業が進んでおりますが、戦後に出たものでございます。三回目が史的発展、四回目に貧乏物語、社会問題管見、あと順番を決めて順次刊行して行く予定です。だいたい一冊の厚さが五〇〇頁前後になる予定で、四五〇頁足らずのものや、厚い巻は五五〇頁を越す大部のものも出ます。皆さんは定価の問題に関心をお持ちと存じます。計算をいろいろやって見ている所で、最終的な数字を申上げられなくて残念ですが、最初は四〇〇〇円台で定価が維持出来ることを目標に考えて来たのですが、いろいろ計算して見るとむずかしいようです。巻によっては五〇〇〇円をかなり出るものがあるのではないかと思っております。比較的薄い巻は四〇〇〇円台で行けそうですが、厚い巻になると五〇〇〇円台も上の方になりそうです。この数年、出版界全体が厳しい状況になっておりまして、こうした本は以前に比べ部数が出なくなっております。従って今回も沢山の部数を見込んで計算するのが、難しい状態で、それがそのまま定価の方へ跳返ってくるという姿になります。出版状況から見て三〇冊を越す大型の企画を実現することは困難で、私供の所でも内村鑑三全集があり、三〇巻を越す大きな全集ですが、河上肇全集と二つを除いてはこういう大型企画はありません。大きな企画の最後のものとなっております。滞りなく最後まで出して行くのは一大事業だと思うのですが、何としてもやり遂げないといけないと思いますし、河上会の皆様にも御協力や御援助をお願い致すことになると存じますが、何とぞよろしくお願い申上げます。

労働者研究者の養成によって

池上　惇

大櫛先生からも「若い者が少いから、若くはないだろうが、河上精神についてどう考えているかを率直に述べよ」という課題でございますので、私供の世代が考えておりますことを申上げましてお教えいただければと存じます。私供は既にして戦後世代でして、四八才ですから、かなりの年ですが、河上先生とはおよそ直接のご指導をいただいたというような関係ではありません。その代り、戦後の激動期で、先生が野坂参三の帰国に際して贈った歌を、あの疾風怒濤を迎え撃つような、凄まじい気迫に打たれて河上先生を知った世代です。そういう意味では先生の生き方を自分の生き方にしようと思って何人もの人間が真剣に生きて来たわけです。もっともその多くの者が挫折したり、今日でも非常に苦しんでることも事実ですが、真向から受止め得たのは我々の幸であると思います。従って河上会にも始めてご紹介いただきました折は先ほど回覧がありました文鎮を、筑摩の全集を買えばやるということで、出口教授当時）からお勧めがありましたので、早速申込をいたしましたところ、あの文鎮と前後して、ミルの言葉を引いた先生の教えの言葉が印刷して配られて参りました。ミルが「凡そ学に志す者は人に知られざるを憂ふる事勿れ」という所から始りまして、「己の知らざるを憂へよ」という、そう意味では学者になろうとする人間に真向から問いかけたものでして

私供、ちょうど、学者になろうと思って助手になろうとした時代に、それをいただきまして、生涯の指針として自分の生き方の中に入れようと思いました。更にもう一歩先生の生き方を私供なりに考えた時、とりわけ研究者として生きていく場合に、先生がやられましたさまざまなやり方というものを検討いたしまして、どういうやり方が私供に出来るか、と考えました。先生は社会問題研究という雑誌をお出しになった。物凄い売行きだったそうですが、岩波さんでも売れないのに、まして我々の如き者が雑誌を出したとて売れるわけがございません。新手はないかということで、労働者を組織して論文を書かせることを考えました。それは七・八年前になります。最近は労働者といいましても、大学卒の労働者が非常に多くなって、彼等は必死になって新しい生き方を求めており、また科学的知識を求めており、その質は、はなはだ高くなっております。教育するならばマスター・コースやドクター・コースに匹敵する教育を施すことが可能であります。昨今は大学関係予算は貧困で私供日本産業論の研究とか日本財政論の研究をやりたいのですが、それに必要な細かい調査まで行う費用は文部省からはいただけません。公務員であるとか、産業労働者—相当な管理者と同じような仕事をしておる、しかも月給の安い連中—を教育いたしますと、（タダでは教育出来ませんので、お金を出してもらって教育しているわけですが）結構論文を書くようになる、だいたい五年かけますと書くようになります。年寄の方も沢山お越しになりまして、四〇才から五〇才の方も、こういうものがあれば、ぜひ論文を書いて見たい、自分も経済の分析をぜひ、やって見たいという方が、ずい分とおられるものです。昨年ヨーロッパに行ってましたがヨーロッパの労働者にはとてもこんな仕事は出来ないのではないかと痛感いたしました。日本の労働者階級の知的水準の高さは驚くべきものがあるように感じます。したがって、一年に数人づつでもそういう人達を蓄積して行きますと、七年たちますと、三十人を越える人がそういう論文が書けるようになりまして、これを組織いたしますれば、日本の産業調査や地方財政の調査を、かなり綿密に行うことが出来るようになります。ようやくそれが手がけられるようになって参りましたので、何年か後にはその成果を還元出来るかも知れません。私供の世代はそういう世代ですので、河上先生の時代には、先生の生き方、私供の時代には私供のやり方があろうかと思います。これは大変時間のかかることでして、研究者を育てるとか知識人を一人前にするとかは一〇年・二〇年の単位で考えないと、とても出来ないことです。それをやれる条件が戦後の日本には出来て来ている。先生がおよそ学に志す者はと私供にお示しになったことは、多くの労働者研究者（私はこう申しております）の間に拡ってまいります。先生の教えを実際に生かそうとする若い研究者諸君も決して少くはありません。そういう方々が、もっともっとこういう会に出て来ればいいんですが、御承知のように昔の学者とはちょっと違っておりまして、河上先生の時代のように学者が自由に動き廻ること自体が、いま、非常に難しい。と申しますのは、若い研究者は共稼ぎで暮しております。ですから先生の自叙伝に出て来ることは今の若い者には「あゝ美しい」という者もおり、また、「河上先生はお気の毒だ」という者もおります。やはり共働きというのはそれなりに新しい人間を作っております。そういう連中は土曜、日曜ともなれば子供を育てなければなりませんので、簡単に出歩けないということもありますし、気楽に男性だけで出歩くことも難しくなっております。しかしそういう若い研究者であるからこそ、逆に今日既にして共稼ぎが非常に多い労働者階級の気持も考え方もよくわかる。その際に皆の間で河上先生が非常に評価が高いのでありますが、彼は共働きでなかったにも拘らず、杉原教授がご指摘になりましたように、健康の問題、全面発達の問題、婦人の問題全部取り

上げております。こういう経済学者は日本ではすくないので、マルクス経済学者を名乗る学者といえども婦人問題や婦人労働について、すべての原論学者が語るという風には、残念ながらなっておりません。個人を語る場合にも家族を語ることの余りに少いのに驚かされます。ところが河上先生は最初からそのような枠組を持って研究を開始されました。私供にとってこれほどの導きの糧はありませんし、したがって経済学者だけでなくて、私供の分野ですと医療経済の方々にも先生の研究者が増えて参りました。河上の全集が出てもっと多くの方が読まれますと、おそらく、人格論、（いわゆる全面発達の理論も先生の理論の中にはずいぶん大きな比重がある）経済と人格といった領域も今後は更に注目されて来るに違いないと考えます。若いものは参加しておらないのでお叱りいただいておりますけれど、決して彼等が無関心でおるわけではありません。ただ、勿論、最近の学生の中には無関心なものもいないわけではありません。いまの教科書では経済学は難し過ぎて教えないことになっておりまして、高等学校までは経済学は習っておりません。止むを得ません。私供がそれなりの努力をすればそれなりの手応えもある若い人が多いわけです。気を強く持っていただきたい。後継者は先生の思想が偉大であればますます多く育つであろうと確信いたしております。

さまざまな縁

山下肇

始めて参りました山下肇と申しまして、けっこうなお酒を寄附していただいた山下ではありません。戦中派ですので、個人的には河上先生と何の御縁もありませんで、なぜ河上会に入れていただくことになったかと申しますと、第一には名前が肇だからでして、河上と山下とは非常に近い関係ですので、子供の頃から親戚のような気持がありましてですネ中学の初めの頃から貧乏物語を読み、高校の頃には社会問題研究を全巻揃えて買ったり、そういう風で河上先生は私の長い間のあこがれでした。岩波の米浜さんに今日有難いお話しを伺ったのですが、ま、有難いというと誤弊があります。恐縮しているわけですが、私はお恥かしい雑文をやたらと書き散らしたりしているような所がありまして、それらをいくつか集めて本を出した経歴もあるわけなんですが、私自身、文学青年のなれの果てみたいな人間で、その中に「詩心旅情」というあつかましいタイトルの書物を出したことがありますが、米浜さんはお役目柄もあろうかと存じますが、古本市で盛んに河上先生の本を探していらっしゃるのか、そういう折に、大きな帯か何かで河上肇詩心旅情という本に出遇い、あれっと思って見たら、それは実は山下の本であった、ということです。古本屋さんも、私の名前では、仕様がないから河上先生の名前で売らん哉というのであったのかも知れません。そういう風に私は河上先生に御縁があるように感じます。専攻はドイツ文学でして、この春東京大学を停年退官になり、大阪の関西大学にお世話になることになりました。関西在住の一人となりましたので、皆様に御挨拶して、この機会にぜひお仲間の一人に入れていただきましたらと思い参上いたしました。記念会には百年祭の前に入会させていただきまして、京都での展示会にも駆け付けたのですが、その他多少の御縁があります。戦中派で戦没学生記念会というのを長くやっていまして「きけわだつみの声」のわだつみ会では（故）東川博先生に大変お世話になり、何回となく忘れ難い御恩をいただきました。ドイツ文学と申しますと住谷先生がゲーテの「旅人の夜の歌」に大変御熱心でいらっしゃいまして、住谷先生の親友でもいらっしゃる林要先生（長年東京で私淑させていただいているのですが）から、御下命がありまして、それに関する資料を提供せよということで先生の方へ伺ったこともあります。近年は社会思想史研究会というのに

出まして、河上肇全集の編集委員の平井俊彦先生とはお仲間で楽しくやらしていただいております。そんなわけですから大阪住いですが、この席にはぜひとも出席させていただこうと参りました。私は文学畑の人間ですが、詩人としての河上先生、書家としての河上先生そういう面に長く憧れを抱いておりまして、私も下手糞ながら、河上先生にあやかるような詩を書きたいなと思いながら暮しております。有明な先生の詩

如今（じょこん）もとめ得たり金丹の術
六十の衰翁始めて詩を学ぶ

というあの一節。東大は六〇が停年で私も只今六一才で、始めて詩を学ぶところで関西生活を皆様の御厚情をいただいて始めさせていただければと存じます。

農民運動家だった父

田辺平

私のオヤジは田辺納でございまして、この会にも厄介にもなっておりましたが、昨年五月に亡くなりました。満で七九才でした。さきほど旧友会という話が出ましたが、戦前農民運動の関係で、大阪に全農の本部があったようで、大阪を中心に全国あちこち廻っておりました。ちょうど昭和三年か四年河上先生が東京で新党組織準備会、そういうものを作るためにおられた時に、当時先生の身辺を警固するため、いまでいうボデー・ガードという役割を農民組合の関係・労働組合の関係・もろもろの大衆団体の代表が、代るがわる先生の宅に寝泊りをして警備に当ったと親父からよく聞かされて来ました。そんなことからか河上先生から愛好しておられたという漢詩を色紙に為書きしていただいたのを、人に会えば河上先生からいただいたものだと話し、だいじにしておりまして、いまも宅に保管しております。先生の人柄についてもよく聞かされまして、講演会でいつも自分を紹介するのに言われるのは、私は一介の文筆労働者であるというのであったそうです。貧乏物語、第二貧乏物語とだいじにしておりましたが、立入りする若い人達が廻し読みしたりしているうちに、行方不明になっておりますが、そんなことで、私もこれから皆さん方にお付合いをさせていただきまして、この会と共に歩んで行きたいと思っております。どうぞ今後ともよろしく。

平和と民主主義を守ること

千田晴之

とだりつきふりかへりみれば山川を越えては越えて来つるものかな

初めて先生を知りましたのは一九四七年東大在学中でしたけれど、当時労働基準会というのがありまして、経済学部の友人から入会を勧められまして、それがつづいており、いまも在籍しております。四七年河上先生の本が出まして御縁いまもそれを大切に持っております。長男が、昭和四五年に結婚致しまして、友人知己への案内状に冒頭読みました先生の作品を書いて招待状の一部に使わさせていただきました。京都へは毎年二回参りまして、来るとまず法然院の先生夫妻のお墓に参ります。いま一つ鰐川さんが亡くなりましたけれど、「二十世紀を告げる会」というものの会員でありますので、四国で毎年会員を募集し、カンパをし、京都府知事選の時には一週間泊込みでやりました。残念ながら……先回は惜敗致しましたけれど、来春の知事選では寿岳先生は御辞退なさったようですけど、どなたかが出ると確信しておりますので、その時には一週間前後、京都へ参りたいと思っております。河上肇記念会会員としてそまつですけど、長男も大学在学中に日本共産党に入党いたしまして協力しております。私も皆さんにご指導いただきながら生ある限り、山下肇先生も仰言いましたように亡き友人の志を受け継ぐこと、あるいは河上

先生のご意志を体得することは、日本の平和と民主主義を守ることにしかないだろうと信じ、これからも真直ぐに一本の道を歩んで行きたいと思っております。

核物理学者として娘に代り

池上栄胤

突然の御指名で私は何の準備もしておりませんが、三五年以前は京都大学に、いうなれば旧制の京都大学におりましたのですが、京都在学中記憶によりますと、だいたい一〇回位、下宿をかわっております。先年ドイツに呼ばれまして、ついでにあちこちしたのですが、ウィーンで最高の功労者はベートーヴェン氏であると。彼は三〇回下宿をたたき出され、かわりまして、それが全部名所旧蹟になっておるようであります。残念ながらそういう御評価をまだ私は京都市からいただいておりません。じつは、その下宿の一つに銀閣寺の真前のお百姓さんに丸一年住んでいたのですが、銀閣寺の境内には一歩も足を踏み入れたことがありません。そういう妙な学生だったのですが、どうした訳か法然院にはよく来ました。本日も何十年ぶりに山門を潜りまして、踏段の高さの高い石段を思い出しました。しかし三十数年、河上先生のお墓がここにあるとは全く存じ上げておりませんでした。ところが先年私の娘が妙心寺に参禅いたしまして、若きライデンシャフトのなせるわざでしょうがそこより徒歩でお参りいたしました。それが縁となり、安井さんから御丁寧なお手紙をいただいたわけです。娘が本日の総会にぜひとも参加したいと言っておりましたが、東京の学校に行っておりますし、私が代りに出て参りました。私は京都の出身ですが、京都大学には私が京都出身だということを知っている人がほとんどおられませんで、東京大学、東京工業大学、あるいは外国といった所をグルグル廻っておりますので、今やどこの馬の骨かわからんようになっております。専門も核物理学。じつはこれも原子力とは直接関係のない基礎的なことをやっております。純粋理科学をやっておれば、必ず人類に貢献すると考えられたのは過去の時代となりまして、現代では私共も襟を正して研究を進めなければならないと思っております。その意味でも今日は心の糧となるような有益なお話を承りまして、いい勉強をさせていただきました。また娘に代ってお礼を申上げます。

時代を越えて河上を蘇らすために

三輪三雄

大阪経済大学、今年二部を卒業した。七年いてましてネ。私は夜間高校は六年行てまして、それから三年ウロチョロして又七年行ったから、そしてここの仏教大に行てまして、死ぬまで大学抜けられへん感じ。最近は一般化したとは言いながらも、やっぱり大卒で肉体労働してる人は少い。僕は倉庫の仕事をしてるんで古典的な肉体労働してるんです。定時制高校行てる時はずっと零細中小企業へ行てまして、その関係で藤田先生の本を少し読み、それで経大に来た訳です。僕なンか若いつもりなんです。でもこの彼から見たら、ちょっと時代がかった話題になる。で、ここへ来たらまた時代がかった感じで……。彼に対してもまた時代がかったという人がいるから……。同じ日本人で同じようにマル経やってて何でこない違うかな。極端に違うんですネ。議論というような余地がない訳です。別宇宙なんです。だから妙に仲良くなる。河上先生についてまだよく勉強してないんですけど、マル経いうたら、この頃評判悪いんです。あまり皆寄り付かない。それで考えるんですが、マル経て一ツのお経の文句みたいで、一ツの教条を言う人、故意に言う人もいてるし、その辺はそうじゃないんだということ伝えて行かなあかんのやけども、

僕の経大の中でも、先生も邪魔臭いだろうと思うけれども、まア普通の公式パッパッ言われて、はア、マル経言うたらそんなチャチなもんかいうわけで、わかってもせん癖に、パッとこう振ってしまう。だから河上先生のようにマル経いうのは一ツの教条ではなくして、一ツの大きな視点、一ツの世界観、そういう形で見て行けばマル経を支持するとかせんとかいう次元の低い話でなくて、もっと広い目で見られるのではないか？もう一ツ僕らはそういう傾向があり、だんだんひどくなるけど、これだけ知っており後は何も知らない。マクルスという人と学問をヨーロッパの大きな歴史の流れの中で、その一環として見る人が少い。理論的なものは嫌やからとっちへ来た、二部でも、ほとんど経済学そのものもイヤがさして来る。そういう傾向ある。生き方として自分自身必要だから最終的にそうなって行ったという形で知って行けば、河上先生の像の深さというのが出て来るんちゃうか。ただ時代がかっているんで感覚は大分ずれますけど。生き方として見たら、僕等は部品という形でもめてますから、一見、経済学と何の関係もない、そういう所から始めて行ったら先生にいろんな形で会えば案外、時代がかっていても、現代の形とかそういう形まで行くんじゃないか？僕もそこまで勉強して行きたい。学問業績云々じゃなく、生き方として是て行けば決して古い人ではないと思うんです。今頃の学者いうのは学校の従業員いう感じで……。学者いうても、嫌な意味での学者は沢山おられるんですが、生き方としての学者いうのは僕等から見て非常に少いン。貴、そんな先生がおったいうのは我々として心強い。話はまとまりませんでしたが、まア以上です。

偉い先生という印象

稲田素臣

私、出町柳のとこで耳鼻科開業してる稲田でございます。河上先生とは直接にお会いしたことはございません。昭和四年の冬に東京で労農党かなんかの結成大会があり、その時に十二月そこらに京都駅で先生が東京へ行かれる駅頭で赤旗事件というのがあり、その時、同じ汽車に乗って私は静岡まで行ったんですが、その時に先生が三等車のデッキのとこで、こうやって挨拶されているのを、通りがかりに見ていました。それだけですが、河上さんとこの家とは個人的な関係がありまして、私の父がやっぱり耳鼻科をやっておりましたんですが、なくなられた長男の政男さんの診察によく行きました。次女の芳子さんと私の家内とが同級生でして、（芳子さんの夫）鈴木重蔵さんあれと、あれは失礼ですな、あの方と私の親友だった男と経済で一緒だったので、鈴木重蔵さんとは二・三遍お会いした。「改造」やなんかに先生の論文が出たのは読んどりました。河上肇の名前は当時、日本人の半分以上は知っとりました。学問やなんかのことはわかりませんが、偉い先生やという印象はいままで持ちつづけておる。そういう関係で、河上会が出来た時、お誘いを受けて入らしてもろた次第です。そういうことです。

全集第二回配本の校訂から

―河上の陸放翁鑑賞―

一海知義

今日はあたらないと思って安心していたのですが……。

全集の第二回配本、二月までにもし岩波が倒産していなければ第二〇巻陸放翁鑑賞の編集校訂を夏からやっておるのですが、それが出ます。陸放翁という人間は、一生に何万首かの詩を作って、そのうちの一万首が残っているわけです。この前の百年祭の時に冗談で言いましたが、"一万首の詩を全部読むのは大変な仕事なんで、多分昭和になってから陸放翁の詩一万首を全部読んだのは河上肇と私だけだ。"というのはウソです

が、それにしても十本の指で数える方しか隅から隅まで読んでいらっしゃらないと思います。河上さんは一万首、全部読まれてその証拠は歴然と京大の陸放翁全集の書き込みや何やの形で残っている。その中から約五〇〇の詩を撰ばれて、その撰び方がまたなかなか面白いですネ。一万の中からどれを撰ぶか？それを評釈されて昭和で言いますと、二四年に出版されたのですが、私の聞いているところでは、当時わずか一〇〇〇部しか出版しなかった。古本屋の目録に全然出ないような貴重な本になってしまった。私自身も持っていない。当時私はまだ大学へ入るか入らんか位の時ですから。ゼロックスで取って来て眞って仕事してるわけです。何回か河上さんの評釈を読んで感心して校訂している。感心しているというのは二ツの面があって、一ツは漢詩の世界というのは河上さんに取っては、さきほど山下先生の話にもあったように、六〇の頃になって、あるいは、獄中で始めて深く触れられた。にもかかわらず、感心する一ツは物凄く博学というか、よく詩を知っておられる。注釈の時に陸放翁の別の詩にはこうあるといくつも一ツの言葉について注釈されている。別の詩にこうあると別の詩が沢山引いてある。ところが別の詩の題は書いてない。そうするとやっぱり全集で活字にするためには別の紙もちゃんと探し出して校訂をしなければならない。そうするとそのたんびに一万首全部始めからずっと読む、そんなことしませんけれども、本当はそうしなければ索引というかインデックスがついてないわけですから…。私はたまたま二十年ほど前、陸放翁の詩集の注釈辞典を岩波さんから出しましたので、陸放翁の詩はずっと親しんでますので、ある程度はあの詩はとか、あの句はどの辺という感じ見当がつきます。で、何とかやってるわけです。陸放翁の別の紙というだけでなくて中国の他の詩人、唐代の詩人とかそういう人達の詩もふんだんに引きながら、注釈が進められているということが感心する一点です。もう一ツは、言葉のうまさ、言葉のうまさというと語弊があるのですが、言葉の捉え方の深さ、その表現の仕方に感心いたします。来年の二月に無事出版されるよう祈りつつ、もし出ましたら大いにお楽しみいただきたい。

東京河上会と河上肇記念会

藤原良雄

私が東京河上会に関係しましたのは、今からちょうど二年前に杉原先生と一海先生の共著『河上肇　学問と詩』という本を、私の所属している新評論から出版しまして、その時に東京河上会の皆さんとか、河上肇記念会の方々と関係を持ちました。ところで東京河上会の白石（凡）さんから、現在、東京河上会は一二〇名の会員がいるわけなんですが、七〇才以上の高令の方々がほとんどでして、なかなか事務的な事が滞り勝ちなので、なんとか協力してくれないかと言われました。私のような若輩者ではなかなか行き届かないところが多々あると思いますけれども少しでもお役に立てればと、それ以来協力さしていただいています。会報の編集とか東京河上会の一年間の活動と言いますと年二回の会報出版と年一回の総会、二回位の例会をして、一回位の公開講演会をというようなことで組んでいるわけです。二・三年位前まではその点がなかなかうまく行かなくて、一年一回しか会報が発行できなかったというようなことでした。ここ一・二年はなんとか滞りなく出来るような状況です。今年は一週間か、一〇日位前に参議院議員の宇都宮徳馬さんのお話が例会でございました。来月の終りには公開講演を、年内に名簿を発行するというようなことになっています。公開講演ですが、まだ正式にどなたにお願いするか決定していないのですが、先程お話に出ています岩波書店から来年一月から河上肇全集が出ますので、東京河上会としても、極力河上全集を宣伝するという購買につながるよう努力するということで、

先日の例会では話があったわけです。

私は今日始めて記念会の総会に出席させていただいたのですが、東京の河上会でも高令の方が集まるのがほとんどですが、なかに二・三の若い方がおられます。現在、河上先生の思い出話だけじゃなくて、河上肇の思想を現在いる我々がどう受けとめるか？河上肇から何を汲みとらなければならないのか？大分前になるのですが、杉原先生とちょっとお話したことがあるのですけれども、経済学者としての河上肇の生命と申しますか、河上肇の経済学は既に乗越えられたのかと、その時は、はっきりとご返事をいただけなかったのですが、先日、岩波書店から内田義彦氏が『作品としての社会科学』として河上肇論を展開されたのですが、その中で内田義彦氏が言っておられることですが、自分がこれまで経済学者としてやってきたことは既に河上先生がやっておられた。こういうことがこの歳になって始めてわかったと。私自身は新評論という出版社で『河上肇　学問と詩』、昨年『アルバム評伝　河上肇』、『求道の人河上肇』と三冊出して来たわけですが、とにかく河上肇の業行と申しますか、河上先生がどういう人間か、まだなかなかその全貌が見えて来ない。これから出版活動としても全集も出ます。それを始めとしまして、河上肇とは何ぞや、現在の我々にとって何を学ばねばならないのか？まだ経済学者としての河上肇は死んでいないじゃないか？こういうところで東京河上会としても活動して行きたいと思っています。事務局をやっておりますので、東京河上会と河上肇記念会とのパイプをより太いパイプにして行きたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

お墓参りに

麻生夫妻

とくに、なにも申上げることがございません。お墓参りのつもりで、毎年出席させていただいております。

健全な会の運営のために

児玉誠

高尚なお話はだいたい終ったことゝ思いますので、当節はお金がものを言いますので、会報の印刷とか発送とかに費用がかかります。私は戦前の日本プロレタリア文化連盟（運動）の生残り一〇人と『煙』という雑誌を出しております。本日その雑誌を少し持って参りまして、受付へ置かしていただきました。その売上げは当会の基金に入れていただくことになっております。それで会報をお出しになるたびに『煙』の広告を載せていただきたい。それについて僅かですけど五〇〇〇円を予定しておりますので、当会の維持発展のためにお納め願いたいと思います。

閉会の辞

大橋隆憲

これで閉会させていただきますが、来年も——再来年も（声）——ご出席下さいますように。

秋の日、杉小立より斜に法然院の庭に落ち、会員の方々の後姿、石段を登り、山門をくぐり、石段を降りて消えて行く。ご健勝に、ご活躍を。

京都（きよう）に〝煙〟あり

1965年　創刊　只今42号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（68～78才）が出している異色の同人誌、埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを〝声〟欄に収めているのも特色

A5判120頁　頒価500円　〒200円

「煙」　同人社

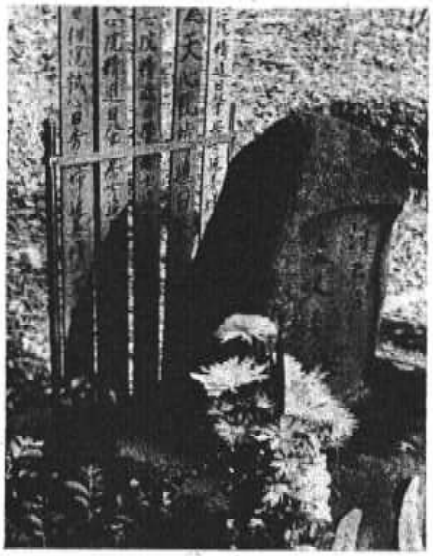
京都市中京区西ノ京南円町71

児玉　誠方

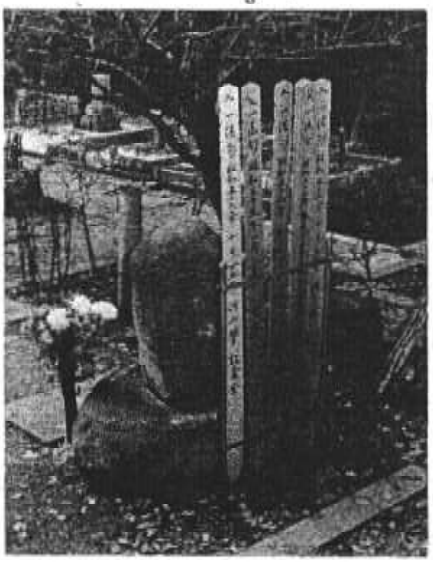
電話　京都（075）811－7646番

振替　京都　15653番

塔婆立ての寄進



毎年総会日程のはじめに法然院本堂にて、河上先生の供養追善のため、法要を営み、お墓に卒塔婆を立てていましたが、塔を支えるものがなく困っていました。会員山下孝太郎氏により写真のような立派な支え、「塔婆立て」が寄進されました。毎回の総会に「般若湯」と「進々堂のパン」をご寄贈下さる山下氏に記して深く感謝の意を表し、会員の皆さんにお知らせいたします。（事務局）



会員通信

《総会出欠票通信欄より、到達順》

三輪三雄（大阪）　母校のことですのでチョット不愉快。藤田敬三先生は、先々代の学長。先代は玉置学長、今は主体性で有名な鈴木亨学長、強く訂正を求めます。藤田先生は理事長。

細井友晋（京都）　今年一〇月は日蓮聖人の滅後七〇〇年に当るので、そのための行事で非常に多忙です。残念乍ら欠席。核兵器、核戦争による人類の破滅の予測される時なので、それを回避する平和運動を御遠忌行事の中に生かすべく努力中です。会の盛会成功を祈ります。

尾形繁之（大阪）　本月、二十四・二十五日小生の関係している財団法人の理事会に出席のため、御殿場市へ出かけます。残念乍ら欠席いたします。会報一〇号ゆっくり拝見します。

岡田義雄（大阪）　藤田先生によろしく御鳳声下さい。

西山態太郎（兵庫）　高令と病弱のため当方出席不可。

井上喜代松（兵庫）　当日、別の会合のため残念乍ら欠席します。「自叙伝」音読会に参加していますが、ご承知でしょうが、来月法然院にお参りします。

曽我まり（兵庫）　よい季節となりました。昨日は友人達と大文字山に登りました。隙もないほどの市街を見て、今更大都会だなと思いました。二十七日から旅をいたしますので二十五日には一寸出向けませぬ。お許し下さい。菊花二・三本の代と思い送らせていただきました。

大野英二（京都）　一〇月二十五日に藤田敬三先生の河上先生についての思い出を拝聴できないのは大変残念です。当日、土地制度史学会秋季大会で共通論題報告の司会をいたさねばなりませんので、まったく残念ですが欠席させていただきます。

稲田秀爾（京都）　河上先生の御存在中に直接御目にかかって、先生の徳を直接受けているのは、現在では、モー私一人かと思いまして御伺い致したいが、九十六才では皆様に御迷惑をおかけするばかり。お許し下さいませ。合掌。

寿岳章子（京都）　学会で、京都におりません。残念です。岩波図書から、河上先生にご縁のある一文を書くようにいってきました。いずれお目にかけることと、なります。よろしく。

寿岳文章（京都）　もはや出席が出来ないほど健康がむしばまれ残念です。この六月、妻と死別してから急に老い、心身共に衰えがひどくなりました。

太田英茂（長野）　数え九〇。二年前、脳卒中に倒れ、今や前後、不覚。わずらわしく、お名簿をはずして下さい。たのみます。新人の間に先生を生かし、国際情勢とんめいにそなえられたし。切望します。

荒尾利就（京都）　当日結婚式があって上京していますので、欠席します。ご案内に深謝し、記念会のご発展をお祈りします。

加藤鼎介（京都）　御案内有難うございました。昨年の総会案内頂きました折は、次回は是非出席したいと決めておりましたのに。一〇月二十五日との事。諦める事と致します。小生一〇月二〇日～十一月五日にかけて出張旅行が決まって居り残念です。丁度気候の良い京都の秋、ゆっくりとくつろげる皆様が羨ましい限りです。冬仕度をトランクに入れる多忙な我身と共に危っかしい世界情勢を悲しみます。河上肇音読会などにも早く参加出来る身分になりたいのですが、数年后になりそうです。働き蜂の年代の者にも皆さんの雰囲気を伝えて下さる会報有難く思っています。

田中文蔵（神奈川）　当日は、青梅の盲老人ホームにいる九〇才に近い叔母を、妹夫婦や家内と一しょに見舞う段取に前から約束してあります。先方も待兼ねていますのでこのたびは、残念ながら欠席悪しからずお許し下さい。杉原君代表を引受けてくれた由。万歳です。よろしくお伝え下さい。前記ホームは住谷、田村両氏の京都ライトハウスと密接な間柄にあります。奇縁です。

山岡操（岡山）　体調すぐれず失礼します。会の御盛大を祈ります。

豊田秀男（岡山）　当日、自由法曹団全国総会に出席しますので残念ながら出席できません。あしからず御了承下さい。

細迫朝夫（京都）　自由法曹団六〇周年の記念懇談会と重なり残念ですが、欠席させていただきます。

中村欽吾（兵庫）　当日予定の所用と重なり残念乍ら欠席。会報は大変興味深く拝見しています。全集の出版予定がきまれば御報らせ頂き度く。

藤沢桓夫（大阪）　河上先生の御業績が、記念会の努力によって現世代に蘇りつつあることに拍手いたします。

竹田幸子（兵庫）　御案内をありがとうございました。丁度、訪中して

おりますので失礼いたします。大塚英子夫人宛にも案内をいただいておりますが、病気入院中のため、こちらも失礼いたします。ご盛会を祈ります。

沢田嘉夫（三重）　会費未納ですが今いくらでしたか？ご多用の中すみませんが、お知らせ願います。前川先生の論文感じ入って読みました。続きを待っています。

村上五郎（奈良）　日に日に老化。会合にも長く、同席し居れぬ身体状況なので、今年も残念乍ら欠席させてもらいます。総会のご成功を祈りつつ、より一層の進歩を期待致します。

豊崎稔（奈良）藤田敬三先生によろしく。

岡村孝雄（京都）　九月以来、左足かかとの骨折で松葉杖をつきながら不自由な生活をしております。一〇月中は医者より注意をうけております。家と会社とタクシーで往復している位です。会報も細川さんに全面的に面倒をおかけしました。全く申訳ございませんが、二十五日は欠席させていただきます。

岡部利良（京都）　ぜひ出席したいのですが、健康上の理由により欠席せざるを得ません。日常生活はまずまずやっています。ご盛会をお祈りしています。

美並竹次（大阪）　生憎く一〇月二十一日より二十九日まで日本銀行本店の考査が行われますので残念乍ら欠席いたします。

管野孝（東京）　折角のご案内乍ら小生左膝疾患のため歩行不自由に付き、遠出は致し兼ねますので、欠席いたします。当日の盛会を祈り上げます。

出口勇蔵（京都）　先日、京都府資料館で佐々木惣一先生の遺品の中に河上先生の雄渾な筆蹟のあるのを知り、いま、また、貴会報によって石川先生への献辞のあるのを知りました。河上先生に関する資料は、今後もまだまだ見つかる事と思います。貴会の御活躍を期待する所以であります。

住谷一彦（東京）　杉原さんの世話人代表が決まり、杉原さんには本当に御苦労のことと存じますが、会としてはまことに御同慶に耐えません。父も肩の荷を下してホッとしているでしょう。

阿部市五郎（東京）　八十四才になろうとしている老令で、ひとりで旅に出られなくなりました。しかし、まだ大学に出ています。

三好泰二（鳥取）　八十一年度総会御案内をいただきましたが当日出席出来ません。昨夏は一人でお参りしました。会報いつも乍ら隅々まで拝見しています。新しいエネルギー一杯だと思います。昨夏は法然院一人で参りました。

渡辺峻（京都）　八〇才になろうとする父が、以前、所用で九州より上洛した際、どういう訳か、「河上肇の墓に行きたい」とのことで、法然院にお墓参りしたことがあった。父は山口高商を卒業したので、河上肇から直接教えをうけることもなかったが、若いころ読んだ「貧乏物語」に大変感銘を受けたそうだ。お墓参りをしたあとで、父は名刺受けに名刺を入れたが、それからしばらくして、ていねいな礼状が来たとのことで、そのことにも父は大変感激したらしくうれしそうにその話を伝えて来た。父の思想の「一部分」が革新的なのは、ひょっとして河上肇の影響であろうかと、その時、私は思った。

富田健一（兵庫）　以前大門先生に申上げたことがございますが、通知洩れのあった年度ですが、「記念会々報No.八」を頂いて居りません。二十五日当日受付にて頂けますようご配慮をお願い申します。又、「百年条誌」の発行時期についてもお聞かせ下さい。

石井公代（兵庫）　第八回「大佛次郎賞」に決定した内田義彦氏の著、「作品としての社会科学」について選考委員の白石凡先生が書かれた批評

（八一・一〇・一朝日新聞）に「河上肇が明治・大正・昭和前期を通じて日本の経済学界の先達大衆のオピニオン・リーダーであり続けた学問上の秘密を考察して社会科学に於ける創造の源泉を明らかにしている。これまで河上の著書を読んだ者も、この著者の目で読み返して見たくなるだろう。」とあったので、目下同書の発行所、岩波書店に注文中であります。

安藤重次（愛知）　岡崎老人会事業多忙のため欠席致します。別途八高機関誌〝やつるぎ〟登載の「釈迦とマルクス」「法然、親鸞と河上肇」なる雑文をリコピーして、三十五部送附致して置きました。総会出席の有志の方にお頒ち下されば幸甚に存じます。

池上雅子（兵庫）　この三月に私が河上先生のお墓にお参りしたのがご縁で貴会に出会うことが出来ました。此の度は東京に居る私に代り、両親が出席させていただきたいとのことです。

山口幸一（愛知）　河上肇先生は、学問の中「つまり、ヒューマニズム」にのみ人生観を見ていられた学者の中の真の学者であられたことに感謝を表します。私はその臨床実験者として搾取。その上に人命をも餌食としている資本の利潤とされて、瀕死の中であえいでいます。月九万九千円也の労災年金の支給のみにて、万死の中で闘病しています。最後の記念会です。

田畑忍（京都）　二十五日前の健康状態如何によって、出欠をきめさせていただきたく、お願いします。

尾崎義一（大阪）　残念乍ら、病のため欠席。私は河上先生には面接した事はありませんが、孫生徒夫先生の講義を、講演を受けた方に依る事と、貧乏物語を通じて其の後の私は変りつゝあります。皆様元気でがんばって下さい。

塩田庄兵衛（京都）　当日、東京で先約の会合がありますので残念乍ら欠席いたします。私達有志の者が始めた河上肇「貧乏物語」音読会は杉原先生はじめ有力講師の方々のご協力を得て、成功裡に一年間のコースを完了しました。これに力を得て、「自叙伝」音読会を一年計画でスタートしましたが、好調の滑り出しです。ご指導、ご協力をお願いします。〝「貧乏物語」を読む〟を出版の予定です。

亀井みさを（京都）　昨年十一月十九日に夫重二は、死去致しました。生前は大変お世話になりました。厚くお礼申上げます。

相澤秀一（大阪）　残念乍ら一週間前に不注意から躓き倒れ腰椎部に故障を生じ、いわゆる神経痛症状で四苦八苦の有様のため欠席。大門さん、杉原君によろしく。

岩崎諒（東京）　入会はじめての総会の御案内に接しましたが出席出来ないのが残念です。病気がちのこの頃、ご迷惑のかかることを心配して欠席に決めました。何れよい日折を見てお訪ねします。

高沢宙男（東京）　私の所へ会報が重複して二通参ります。お調べになって御訂正下さい。

和島岩吉（大阪）　毎度御世話御苦労様です。当日、日程のやりくりがつきませんので欠席いたします。

竹中章（和歌山）　折角御案内を頂きましたが、当日は公用があり、残念乍ら参会できません。河上先生の思想と人とが、少しでも多くの若い世代に伝達されることをいつも願っております。

司馬一男（兵庫）　河上会に入会して会費を納いたいのですが、どうすればよろしいのかお尋ねします。不健康のため出席を取り止めることは頗る遺憾ですが、是非もありません。一九一七・八年頃、今から六十余年前河上博士の「貧乏物語」「或る医者独語」、佐々木博士の「立憲非立憲」等の論文を新聞紙上で毎日待ち兼ねて読んだものですが、以来、「社会問題研究」など、河上博士の諸著作は楽しく読んで一九八一年の

今日、尚余命を保っている次第です。尚、余命の存する限り、博士の名文を読みたいと思っています。河上肇全集の公刊されるのを待って居るのですが、果して出るのか。

大島清（東京）　総会には残念乍ら出席出来ません。法然院の庭前、落葉しきりに河上先生の墓前に散り敷いている光景を想像しています。東京河上会も今月は例会、来月は公開研究会を開く予定です。皆様によろしく。

白水実（東京）　小生名が、白木実になっています。白水に訂正して下さい。

佐藤克己（東京）　二十一日から連日、会議（国際シンポジウム）が重なりますので続いて二十五日に京都まで旅行するのは健康を慮った上差し控えることにします。河上先生のご冥福を祈ります。

永岡薫（京都）　法然院の近くにいながら、他の止むを得ぬ事情で失礼させていただくことと残念に存じます。真理が実を結び生きづくよき御会合であられるよう心より祈念いたしおります。

相沢芳郎（新潟）　ぜひ一度でも出席したいものと思っていたが、今年も又、出られないこととになった。自分にとって河上先生は決して遠い人ではないことは、今、古稀を迎える（昭和八年大学卒）者として当然と受けとめていますので残念です。

藤谷謙二（大阪）　小生宛のご通信は、いつも重複して同じものが二通送付されます。お調べの上、無駄を省かれるようお知らせします。

戸田京次（大阪）　二十四日に近畿都市大会があり、二十五日当日に重ねての外出になりますので欠席いたします。

武田正二（東京）　全集の公刊を待望しています。

渡辺貞雄（兵庫）　先約あり、残念ですが欠席いたします。藤田先生によろしくお伝え下さい。

中島義勝（東京）　御無沙汰に過ぎております。当日都合つきませぬため編集部、米浜が参加します。刊行一月を決定。十一月から新聞予告。内容見本を用意します。よろしくお願い申します。

佐藤明（兵庫）　いつも欠席ばかりで申し訳なく思っています。私は田舎の家に移り、あまり遠方へ参りませず、今後共出席しかねます。ごめいわくばかりかけるので、心苦しく、善後策を講ぜねばと感じていますが。

内田糧吉（奈良）　大門君、御健在で何よりです。

前田愛人（神奈川）　残念乍ら二十五日四高九十五周年記念出席のため欠席。来年は是非出席したく心に決めて居ます。

橋本敦（大阪）　総会の御盛会をいのります。河上先生をしのび、藤田先生のお話しも伺いたいのですが、私は今、八十三年参院選挙で全国区から捲上重来を期し、西日本各地をかけまわっていますので出席出来ないので残念です。

山田健雄（茨城）　入会して始めての総会なのでぜひ出席したかったのですが、結婚したばかりで、身辺の整理に追いまくられて出席出来そうにありません。悪しからずお許し下さい。

福島史郎（京都）　会運営ど苦労さまです。病気療養のため左記、新住所に転居しました。以後のご連絡は下記にお願いします。（略）

上田隆（山口）　郷土出身の河上先生の偉大な人生に打たれ、友人にすすめられ入会させていただき、先生のねむられる法然院に皆様と共に参加したく思い楽しみにして居りましたが、連絡が、一寸、おそく、勤務の都合で残念至極ですが、参加出来ません。盛会を祈ります。

徳久武春（大分）　欠席します。河上先生より受けた講義に労働者階級の解放は賃金鉄鎖を断ち切る事である。世界一の資本主義国日本では大変な困難である。その困難を乗り越えねば解放はあり得ないと詳細に

聞いています。今もその通りであると確信しています。その講義も今も忘れていません。詳細に記憶しています。

三木勲（和歌山）　お世話の雑務、多謝。会報№一〇に誌るされている山本勝市氏は旧知の先輩ですから機会がありましたら話題の蔵書（ボルヒアルト「通俗資本論」）の経緯を伺えるかもわかりません。（№一〇の余部ありましたらお送り下さい。）

内海庫一郎（東京）　このところ、夏以来、雑用多忙で、仕事がたまっておりますので、今回は甚だ申し訳ない話しですが、失礼させていただきます。先般東京河上会の会報に「河上肇と蜷川虎三」を書き、経済統計研究会の総会では、「蜷川虎三の理論的業績」という報告をいたしました。皆様によろしく。

高木右門（東京）　昭和三年河上先生が京大を辞められたあと右翼が先生のお宅を襲撃するという噂さが流れその護衛に、もと三高進化会の会員数名を派遣したときの、玄関での先生の面影を今でも鮮明に想い泛べることができます。

遠藤哲次郎（埼玉）　いつも資料ご送付ならびに会合へのご招待にあづかり恐縮に存じます。当日は東京にて一日中用務がありますため、残念乍ら出席致しかねますので、あしからずご了承下さい。

大塚君子（新潟）　会報と総会の御案内ありがとうございました。残念乍ら、すでに他に予定がありますので、欠席いたします。八十年の会費まだお送りしてありませんでしたので、切手にして三千円也同封しましたので、おあらため下さい。

山中謙二（東京）　健康を少し害していますので残念乍ら出席できません。御盛会を祈ります。藤田敬三先生によろしくお伝え下さい。

福本正夫（奈良）　来月の市議改選の諸準備など重なって出席できず残念です。ご盛会を祈ります。

長生俊良（大阪）　一ケ月余、郷里山口に帰省し、昨二十一日夜帰阪しました。出欠〆切おくれ、残念ながら欠席いたします。

大泉宗次（兵庫）　ご案内をいただき有難うございました。河上肇記念会につき平素何かとご配慮いただきメンバーの一員として、深謝申し上げますとともに、今後一層ご発展の程祈念いたします。

柏木十四夫（大阪）　毎々お世話をお掛けいたします。仕事の関係で参加できません。後日、法然院へ行かせていただく所存です。

後藤嘉七（大阪）　大変、会のためにお世話様です。いつもお招きをいただき乍ら勤務の都合で欠席して申訳ありません。十月十五日の京都河上会の音読会に私の恩師宮川先生がおいでになりましたからおたづねしました。

梯明秀（京都）　ご案内いただきありがとうございました。体調をくずし、遠くへ外出出来ませんので、残念乍ら失礼致します。

和田洋一（京都）　九月に七十八才の誕生日を迎えた頃から急におとろえを感じはじめてきました。

山下孝太郎（京都）　当日私事乍ら、分家の法事相営みますので、時間的に早退失礼致します故、よろしく。

逸見千鶴子（神奈川）　総会の御案内誠におそれ入ります。幹事の方々にはいつも大変お世話に相成りおります。残念乍ら欠席させていただきます。御盛会を祈り上げます。

児玉誠（京都）　一別以来、絶えて久しくご無沙汰失礼しています。お元気のこととお喜び申し上げます。さて、昨十八日(日)清水成就院にて、〝燎原の会〟の総会があり、席上槇正博君から河上会が二十五日にあると聞きましたが、私はご通知をいただいておりませんので、したがって同封のハガキではありませんが、出席させていただきますのでよろしくお願いいたします。本日印刷所より控え分を借り受けて本状を認めてお

ります。事務局の不慣れと思いますが、槇君とともにかちぐはぐだったようです。もし名簿脱落でしたら、ご登載下さるよう念の為お願いしておきます。時分柄、くれぐれもご自愛下さい。八十一年十月十九日夕。

寺前いわお（京都）　御返事おくれて申しわけありません。法然院には京都に帰るたびにお参りしていますが、集会に出られず残念です。そのうち是非とも。

島貫洋（神奈川）　昨一〇月二四日、先月亡くなられた映画評論家、岩崎昶先生をしのぶ会が神田岩波ホールであり、プロキーの残存作品すべて（といっても六本合わせて一時間たらずしかありませんが）が上映されました。その中の「山宣労農葬（京都）」に河上先生が登場しています。小生としては初めて見るものです。すでに会の方々は御存知かも知れませんが、もしそうでなければ、めずらしい映像による資料ですのでお知らせいたします。連絡先は次の通り。（略）投函が遅れ出欠票としては役に立ちませんが通信欄記載の内容を「情報センター」の方に伝えていただきたく。

竹内猛（茨城）　日程の都合上、出席出来ないことが多くなりますが、私の大学の卒業論文に河上先生を中心としたものを書きました。先生については尊敬していますので、何かと御連絡下さるよう今後ともお願い致します。

渡辺美登（京都）　出席の通知を出しながら、欠席してお許し下さい。じつは、藤原ひろ子の後援会から、二三・二四の両日、国会見学をいたしまして（会長をしているので）二四日は夜おそく帰りまして（八三才のババアは体力が持ちませぬ）遂に欠席。これにおこりにならないで次の機会にはぜひまたご案内下さいませ。貧乏物語や自叙伝の音読会には出席してます。

櫛田ふき　都合がつきかねますので、失礼いたします。

石井公代　拝啓、陳者、今日の総会にはぜひとも、出席したいと思い、出席の通知を差上げておきましたところ、じつは私事、昨年秋に直腸癌を手術して、少々、体が弱っておりますのに、昨夜午前四時すぎまで、いかにしても眠れなかったため、欠席の已むなきに至りました。この段なにとぞ、あしからず御海容願い上げます。先日は会報一〇号を誠に有難うございました。全頁を一気に読了いたしました。今日は岩波書店に注文していた内田義彦著「作品としての社会科学」が一昨日到着いたしましたので、耽読しております。今日の総会盛会だったことと存じます。今日、午前一〇時四〇分頃、法然院に欠席の電話を入れておきましたが右御一報まで申し上げます。敬具

白石凡（東京）　拝復、御無沙汰しております。秋風が立ってようやく体が調子を回復したようですが、歩行は相変らず難儀、御手紙ありがとう。杉原さんをくどき、成功おめでとう。総会にまだ行けないのが残念です。盛会を祈ります。頓首

山田ユキ（京都）　夫山田幸次は去る十月十二日安井病院にて死去いたしました。とりまぎれておりまして、お返事がおくれまして申訳ございませんでした。生前の御厚情に御礼申し上げます。会報一〇号御送りいただきまして有難う存じました。興味深く読ませていただきました。

井関安治（豊中）　病気療養中のため欠席。祈御盛会。

河上肇情報センターだより

当センターへお寄せいただいたお便りは、大橋隆憲、杉原四郎、一海知義、小西輝夫、岡村孝雄、中川秋一先生遺稿・追悼文集刊行委員会、大久保雅撰、西川勉の各氏でした。お教えいただいた「河上肇関係文献」は次号より誌面の許すかぎり逐次掲載させていただきます。本欄では次

の三点を紹介いたします。

NHK大学講座『日本の経済思想』、東京外国語大学教授長幸男

新年一月二十六日には、第十七回の講義として「河上肇マルキシズムへの遍歴」が予定されています。放送はNHK教育テレビ午前六時三十分から七時、再放送は同日夜の午後十一時三十分から十二時です。是非ご覧下さい。

『人生読本』ラジオ第一放送　一月二一～二三日午前六時一五～三〇分、上野誠の河上を詠んだ短歌が紹介される。お聞き下さい。

中川秋一遺稿集、中川秋一先生遺稿・追悼文集刊行会編集・発行（広島）一九八一年一一月一一日、口絵、一〇、四〇七ページ

中川秋一氏は、一九一〇年広島県生れ、戦前プロレタリア文化活動に参加、戦後は中国新聞社に勤務、広島を中心に労働組合、文化運動などに活躍され、一九八〇年一一月一一日に死去された。本書中、中川氏による「高い山・河上肇」と題した一つの章があり、氏の河上評伝が載せられている。同封されてある刊行委員会ニュース第一～五号によれば、師と仰ぐ人々の本書刊行へのご努力が知らされます。会の連絡先は「広島市南区松原二―六二、広島中央郵便局私書箱四号」で印刷代等の財政的援助が呼びかけられている。

上の写真は本書口絵の一つで、岩国の河上肇の墓におまいりしたありし日の中川氏である。

当番日誌

○当番日誌は前号会報発送の以前から始まる。九月一六日、たそがれの近衛通りより楽友会館に、事務局員が集り相談会。会報準備進行状況の報告ののち、三年越しの課題である名簿整備の件、論じられやゝ進むかに見える。総会と総会準備の分担等決める。大半は大門氏の引受けとなる。ヤング・ソールジャ大門氏の分担となり、この分なら来年も同じ姿となりそう。河上肇の科学的真理と宗教的真理とが話題となり、側耳すれば大橋名誉教授は慎重な言廻しで明言を避けられる。先生、この主題の論文を発表されない筈はあるまいと信じて止む。

○十月一六日。大門氏身内葬儀のため、代用品として大久保出席。白石代表は風邪にて欠席。大島清副代表の司会。宇都宮徳馬氏、平和と軍縮についての講演。反論を封じながらの説得的な論の運び。

○十月二五日、総会後の片附けののち、ほど近い喫茶アトリエの奥にて打合わせする。総会報告号の分担を決める。会報配布は返送されて来る率は極めて低いので、その面でのロスは少いが、一〇号の配布部数は事務的、財政的に負担が大きいので、名簿の再編集を機に、一一号より配布先を再検討すべく、配布基準の見直しを行うこととするが、本件は杉原、大橋両先生のお考えも伺った上で実行に入りたい。封筒も再版。

○堀江英一氏の訃音が新聞に出た。会員の方々にもそれぞれ感懐と思出を持たれた方も多いのでしょうか？　合掌。

○録音テープを止めては廻し、戻しては廻すうち、秋の陽はケヤキ、ナンキンハゼの黄、紅の葉を輝かせ、翳って、色深めつゝ窓外に日曜は次次と過ぎて行く。一一月の末には本稿を含めて原稿はすべて終らないと新年に会員の方々の手許に届かない。はやばやの新年挨拶は空虚で恥しいから筆を擱く。

（大久保　記）